

薰風



創刊900号記念合同句集
末黒野俳句会

野良着

皆川白陀

(初代主宰)

水仙も梅も凜然たる白さ
遠席に野良着の母や卒業す
大将居らんと困るすばい麦の秋
捨苗の束ごと根づき祭来る
とろろ飯少年衿を汚しけり
酒うまきうちは死なじよ鉦叩
三度飲む御正忌の風邪葉かな
木守柿見てをりパンへ蜜塗つて
梅林へ行く元日の海を見に
齒ざはりの七種サラダ朝餉かな

衣 被

青木重行

(二代・四代主宰)

円覚寺料峭として猫の恋
胸襟は開くものなり飛花落花
東京の夏沈黙にして銀座
はらわたも涼しき月の首途かな
娘にもある痣が哀しや衣被
柿食うて真実父母のなかりけり
天指して冬なまぐさき平和像
竹林に直ぐなるはなし日脚伸ぶ
松過ぎの万歳が降り文庫駅
父母を知る人も減りたるどんだかな

治 験 薬

中野陽路

(三代主宰)

嘯や島の生活のみりん干し
本牧のどの横丁も花吹雪
妻の眼に治験薬など柿若葉
頑なに旧仮名遣ひ新生姜
白ワインより新涼のコルク抜く
ペンションといふに一と夜を茸汁
園丁の刈り残したる冬芒
廃船に猫の棲みつき冬早
浮ぶものなくて四日の神田川
人日や悼句のための墨磨りて

芋の露

甘田正翠

(五代主宰)

啓蟄の林中に耳聴きかな
豌豆の芽立ちの遅々として凍つる
黴生えてゐし定年の鞆かな
雛粟に風なき日とてなかりけり
芋の露こぼるるときもしろがねに
昨日よりけふの影濃き貝割菜
野仏の童顔のほか冬ざるる
久女忌の雪の椿となりにけり
師の家に寄らで過ぎたる鳥総松
焼藪屋常のごと来て七日かな

鴨の陣

小川玉泉

(六代主宰)

白梅に触れ来し風の絵馬鳴らす
目刺買ふ漢の素顔見られゐて
河骨の花の総立ち沼明り
一枚の青田とみしは五枚かな
月の透く秋の簾となりにけり
雑念を拭ひ去つたり夕紅葉
立ち直るまでがなかなか鴨の陣
枯るるものなき石庭の声を聴く
海坂の千里を一気初日射す町
父母の余慶を今も松飾る

春夫の詩

松本三千夫

(七代主宰)

抱くもの欲し四肢の先冴返る
二つ目は確かなり虫出しの雷
一水もて彩頒ちけり花菖蒲
熱帯魚秘書に飼はれて透明に
夕花野翹あるものは飽かず飛び
春夫の詩ほど苦くなし初秋刀魚
波郷句碑より時雨れけり一騎塚
冬波の石引く力見て飽かず
去年今年星それぞれ的位置に座し
御降りや池は底まで雨の色

夜の秋

黒滝志麻子

(八代主宰)

里山の柵のほころび夕蛙
春風や鳩は卯建に人は野に
窓外のものみな親し木の芽張る
銀の匙触れ合うて鳴る緑の夜
一湾の夕日惜しめり遊び舟
封緘の糊なめらかや夜の秋
畦豆やふところ深き山の影
暮れ残るものに水音木の実落つ
一つづつ消して一つを夜長の灯
すぐと言ふ駅の遠しや初時雨

初 蛩

森清

堯

(九代主宰)

矢狭間をぬけて淡海の春の風
白れんの百花もみあふ空の蒼
日暈を背や泰山木の花
くづし字を消して点して初蛩
夏雲の影走らせて草千里
ふんはりと谷戸の日を乗せ花すすき
葛の葉のうねりに遅れ溪の風
夕照の燃えむばかりの枯野かな
寒の水透けて柁目の杓の底
末広の水脈の交はり初景色

薫風（創刊九〇〇号記念合同句集）

編集 末黒野編集部

発行 令和三年八月一日

発行人 森清 堯

発行所 末黒野俳句会

〒二二六―〇〇二八

横浜市緑区いぶき野十一―三〇

今村千年方

印刷所 株東洋信号通信社